

第5章 調査のまとめ

第1節 甲府盆地の近世水田遺構について

(1) はじめに

甲府盆地は果樹王国として知られており、ブドウ・モモなどが特産品として広く知られている。ブドウ・モモは毎年全国の1・2を争う生産高を誇っている。これは、特に気候面と地形面から甲府盆地が果樹栽培に適していたことに起因している。

甲府盆地の気候は内陸性の気候であり、次のような特徴がある。①気温の日較差・年較差が海岸地方に比べ大きい。②年間降水量は比較的少ない。

また、甲府盆地の地形は、盆地に流れ込む川々が作り出した扇状地となっている。扇状地は、砂礫によって構成されている地形であり、その特徴は、③河川水は地下に浸透して伏流水となる。④扇央部では地下水位が深いため飲料水や灌漑用水を得ることが難しい。⑤排水良好な土壤である、などがあげられ、気候・地形ともに果樹栽培に適したものといえる。そして、扇状地の水利的特徴から、そこでの集落は、水を得ることが困難な扇央部には発展せず、河川水の得やすい扇頂部か地下水位が浅くなつて湧水池の分布する扇端部に開ける傾向がある。しかし、山梨県内で果樹栽培が盛んに行われるようになったのは昭和初期のことであり、それ以前の山梨では決して果樹栽培が主な産業ではなかった。

果樹栽培が盛んになる以前には、何が主に栽培されていたのだろうか。直前に遡ると養蚕が挙げられる。江戸時代には、今回の藤田池遺跡で水田跡が発見されたように、稻作が盛んに行われていた。もっと遡れば甲斐黒駒の名で知られるように馬を育てる牧があったとされている。このなかで、一番山梨の気候・地形に似合わないものは江戸時代に行われていた稻作であろう。稻作にとっては、高温多湿の場所が適所であり、盆地・扇状地の気候・地質に見合つたものではない。

(2) 山梨の水田開発

山梨で稻作が多く行われるようになったのは、戦国期に武田氏の支配が行われていた頃からである。先に述べたような気候・地形的な条件により広く水田が行われなかつた甲府盆地内であったが、御勅使川扇状地を例にあげると、武田信玄の治水事業により水害の心配が少なくなってきたことと、江戸時代に入って日本三大堰の一つである徳島堰が設けられ、干ばつの被害が軽減されたことにより、水田が広がるようになるのである。

しかし、水田を造る状況が少しずつ良くなつてきてはいるが、いつも災害の危険性にさらされることは変わりがない。今回の藤田池遺跡をはじめ水田の遺構を発見した遺跡では、洪水の跡が多く見られ、何層にも水田面が作られている様子を確認することができ、洪水に遭遇しても根気強く水田を造りつけたことがうかがわれる。

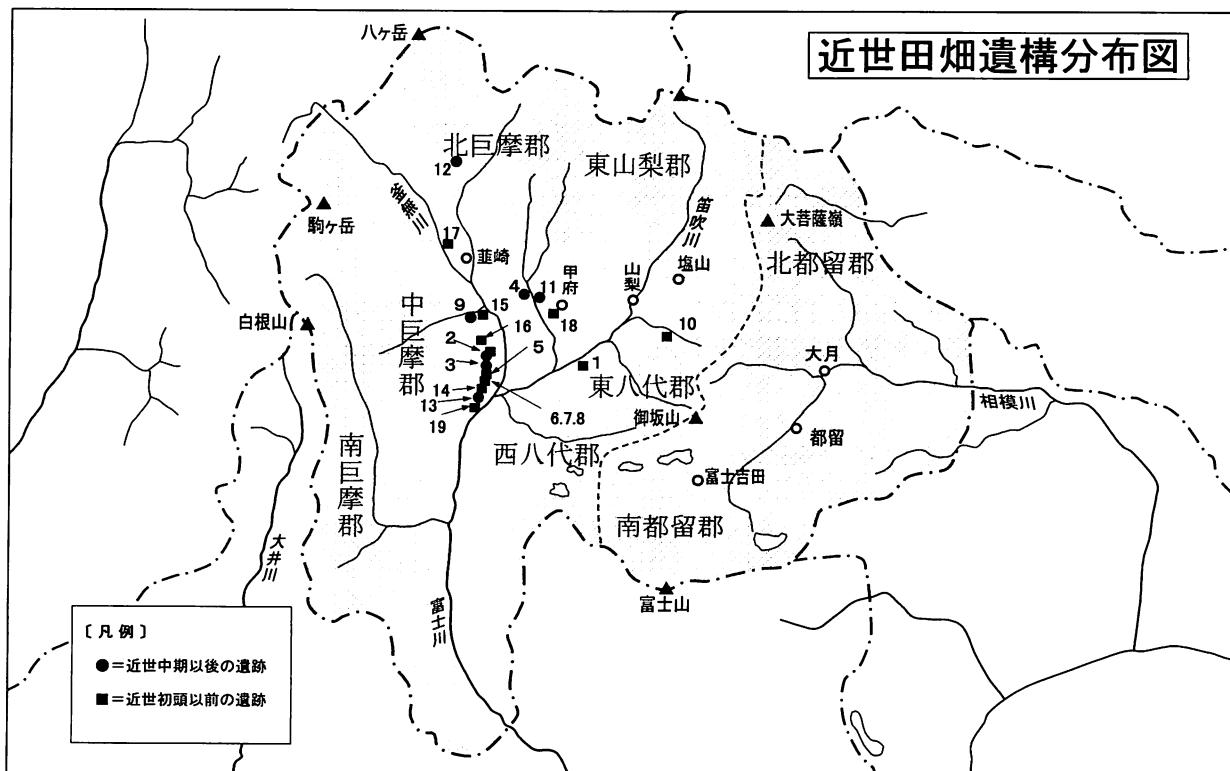
山梨県内の田畠遺構の分布を見ると、身洗沢遺跡(1)、東河原遺跡(4)、大塚遺跡(9)、古婦毛遺跡(10)、富士見1丁目遺跡(11)、仲田遺跡(15)、宮ノ前遺跡(17)は、川の近辺に立地している遺跡である。また、二本柳遺跡(2)、向河原遺跡(3)、油田遺跡(5)、大師東丹保遺跡1~3(6・7・8)、町屋口遺跡(13)、宮沢中村遺跡(14)、百々遺跡1(16)などは、川の近辺であるとともに扇状地の先端部分に位置している遺跡である。横森赤台(東下)遺跡(12)は、河川より少し距離があるうえに、遺跡の標高よりも河川の標高の方が低いため、水を得ることは困難であると考えられる。しかし、横森赤台(東下)遺跡で発見された遺構は畠地であるため、水田に比べて水が少なくすむ可能性があり、他の遺跡と比較することは難しい。甲府城下町遺跡(18)も河川から離れている遺跡であるが、遺跡内から多くの井戸跡が見つかっており、水の便に関しては心配のない場所であったと考えられる。

(3) 山梨の近世水田

以上の中で、江戸時代の遺構と見られるものは、二本柳遺跡、向河原遺跡、東河原遺跡、大塚遺跡、富士見1丁目遺跡、町屋口遺跡、甲府城下町遺跡である。今回の発掘対象であった藤田池遺跡(19)は江戸時代の遺跡であることもあり、立地的な面も合わせ見て、1~18までの遺跡の中では、二本柳遺跡と同じ時代、同じ地形に開かれた水田と考えられるのである。

二本柳遺跡では、古代末から近世までの水田が発見されているが、江戸時代に相当する水田遺構からは、畦畔、杭列、水口、ヌルメの溝などの水田施設が確認され、人間の足跡や稻株状の痕跡が検出されている。畦畔の多くは、水田を区画するためのものであり、中には畦畔に沿つて杭列が埋め込まれているものもある。これは、畦畔が崩れないように板材を併用しながら土止めをしたと考えられる。水口は、水田間の水のやりとりのために設けられた施設であり、貴重な水を無駄なく水田に行き渡らせるためのものと考えられる。ヌルメは、水を温めるための施設である。二本柳遺跡は、扇状地の伏流水が湧き出るところであるため、そこで得られる水は冷たい地下水であり、暖めて使う必要があったのではないかと推測する。

現中巨摩郡地域に存在している水田遺構のある遺跡は、水を得ることが難しい扇央部には存在せず、扇状地に



第17図 近世田畠遺構の分布

No.	遺跡名	所在地	遺構	遺構面積	その他の遺構	主な遺物	年代	参考文献番号
1	身洗沢遺跡	東八代郡八代町	水田跡	200	住居跡、ピット、堅穴状遺構、溝状遺構	木製品、種子、土器	弥生～古墳	1
2	二本柳遺跡	中巨摩郡若草町 加賀美字山富地	小区画水田 (方形区画遺)	250	溝	陶磁器、かわらけ、木製品、内耳土器、種子類	戦国	2
		中巨摩郡若草町 十日市場字二本柳	水田跡 水口	7900	井戸、木棺、水路、杭列、畦、 旧河道	土器、木製品、石製品、金属 製品	江戸	3
3	向河原遺跡	中巨摩郡甲西町 江原	水田跡	2000	溝跡、水路跡	木製品、漆器、土師器、陶磁 器、木杭	中世 近世	4
4	東河原遺跡	甲府市池田一丁目	A区…3面 B区…3面	1725.9		土師器、陶磁器、銭貨、煙管	近世以降	5
5	油田遺跡	中巨摩郡甲西町田島 字油田	水田跡	250	弥生溝状遺構、古墳溝状遺 構、杭列、土坑、ピット	弥生土器、石器、木製品、古 墳土師器、須恵器、平安鉄製 品、銭貨	平安	6
6	大師東丹保遺跡1区	中巨摩郡甲西町 大師字東丹保	水田跡	1200	杭列	弥生土器、石器、木製品、鎌 倉木製品	弥生 鎌倉	7
7	大師東丹保遺跡 2・3区	中巨摩郡甲西町 大師字東丹保	水田跡 畝状遺構	1000	溝、地割れ跡、掘立柱建物 跡、溝、杭列、井戸跡	弥生土器、木製品、中世土 器、陶磁器、中国青磁、白 磁、木製品、石製品、金属製 品、骨角製品、動植物依存体	鎌倉	8
8	大師東丹保遺跡 4区	中巨摩郡甲西町 清水字川原田	水田跡	200	古墳、水路、溝状遺構、杭列	弥生土器、古墳土器、鎌倉土 器、中国製磁器、木製品	鎌倉	9
9	大塚遺跡	中巨摩郡八田村 野牛島	水田跡3面	75	住居跡、区画溝、溝、土坑	縄文晚期土器、土師器、須恵 器	江戸	10
10	古婦毛遺跡	東山梨郡勝沼町 下岩崎	水田跡	2200	埋甕・住居跡	縄文土器、土師器、須恵器、 中世土器、陶器破片	中世～ 近世初頭	11
11	富士見1丁目遺跡	甲府市富士見1丁目	近現代烟 水とり口	662.04	近世以降水路、弥生～古墳 の水田	弥生土器、S字状口縁台付甕	近世以降	12
12	横森赤台(東下) 遺跡	北巨摩郡高根町 箕輪	畠地	50	縄文集落跡、平安堅穴状遺 構、中世墓地	土器、石器類、土師器片、五 輪塔、人骨、漆碗、古銭、内 耳土器小破片	近世	13
13	町屋口遺跡	南巨摩郡増穂町 青柳町	水田跡 取水口	11000	水路跡(道)	古銭、木製品、金属製品、陶 磁器類、泥面子、石筆、砥石	幕末 ～明治	14
14	宮沢中村遺跡	中巨摩郡甲西町 宮沢字東宮沢	水田跡4面	265	江戸の民家、寺院跡、中世の 護岸	陶磁器、土器、木製品、古 銭	平安 ～鎌倉	15
15	仲田遺跡	中巨摩郡八田村野牛島	水田跡	1723.5	道路	かわらけ、青磁片、古銭	中世	16
16	百々遺跡1	中巨摩郡白根町百々	畝状遺構	300	平安堅穴住居、掘立柱建物 跡、土坑、溝、ピット	弥生土器、打製石斧、平安土 師器、須恵器、金属製品、石 製品、ウマ骨	平安？	17
17	宮ノ前遺跡	韮崎市藤井町字宮ノ前	水田跡 畝状遺構	800	縄文堅穴住居、奈良平安堅 穴住居、掘立柱建物、土坑、 溝状遺構	縄文土器、奈良平安土師器、 須恵器、金属製品、石製品、 木製品	弥生前期 平安	18
18	甲府城下町遺跡	甲府市	畠跡				江戸	
19	藤田池遺跡	南巨摩郡増穂町青柳町	水田跡 畠跡		部材列、水路	陶磁器、銭貨	江戸	

面積の単位は m^2

表2 山梨の水田・畠遺構の一覧

浸透した水が湧き出す扇端部もしくは、河川の近辺に位置している。地面に潜る前の水を扇状地の扇頂部で捕まえることも可能であるが、山岳地より水が流れ出す場所であり、居住する土地を確保できたとしても、十分な収穫量を約束してくれる広さの水田を確保することは難しい。また、扇頂部で捕まえた水を各水田に分け与えるための灌漑設備が必要となってしまうため、より多くの労力を費やす結果となってしまう。

(3) おわりに

甲府盆地の水田耕作に限らず、農業をするうえで気候・地形的な条件から発生する有利・不利は、どこにでもある話である。ただ、その限られた条件の中で一番最良な作物と方法を選んで耕作しているに過ぎない。数ある作物の中で、現在、甲府盆地に住む人々の何人かは果樹栽培を選び、江戸時代に増穂町近隣に住んでいた人々の何人かが水田耕作を選んだのである。現在の状況から考えれば水田耕作は山梨の風土に適していない作物かもしれない。しかし、その時代の世間一般の需要などもふまえ、最も適したものを見出し、耕作していたと考えることもできるであろう。

第2節 藤田池遺跡の水田・畠の遺構について

(1) 水田遺構

今回の調査では、前章に見たように、計16の水田区画が確認された。これらの中には、畦畔を介していくつか同時存在し有機的に結びついたものと、標高を違え、時期的に前後するものがある。水田ということで、本来的にこれの時期を論じることができる遺物が、いくつもあるわけではなかったが、全般的に明治期にはいると思われる直接的な遺物は見られず、江戸時代後半の年代が考えられるものである。

これらの水田遺構では、畦畔に通水施設が設けられ、前節でもふれていることだが、水を使い回す状況が見られた。

多くの水田区画（1-1号、2-4号区画など）では、上位面と下位面が確認された。これは区画はそのまま踏襲されながら、20cm内外の間層があり、近接した2時期が認められたものである。このうち上位面では、安定した田の床土が形成され、そこに人の足跡や稻株の痕跡が残るという状況はあまりない。これらは下位面に顕著に認められる特徴的な要素となっている。上位面で特徴的なものとしては、2-4号区画と3-11号区画における2-1号部材列と3-1号部材列である。これは耕作上の区切りとの性格が想定されるものだが、建築廃材、解体した桶材、丸棒などを組み合わせて、長く列を作っている。そのための明確な掘り込みなどは確認されていないが、3-1号部材列では杭や廃棄された鍬先などを打ち込んで補強しているのが注目された。

3-11号区画などでは、下位面付近で木の葉が土壌の中に入り込んでいるのが確認されているが、これは村明細帳などに見える刈り敷き（「かっちき」などとも）に相当するものではないかと考えられた。山の草やそだなどを刈り取ってきて、肥やしとして田や畠に敷き込むもので、70歳過ぎの発掘調査に従事した作業員さんなどは、子どもの頃のこととして「かっちき」があったことと、眼前に現れた木の葉とを結びつけて見ていた。

下位面についてはもう一つよく理解しがたい状況がある。それは2-4号、3-9号、3-11号区画で、下位面を切り込んで見られる何条もの掘り込みの存在である。地下水を抜くため、粘土を利用するため切り取ったなどの推定もあるが、それ以上のことは不明である。

(2) 畠遺構

藤田池遺跡の1次調査を実施しているとき、同じ路線上を北に3~400m隔てた町屋口遺跡の調査が行われていた。二つの遺跡を比べて、接近している近世後半の水田遺構を主体とした遺跡でありながら、どこか異なる様相が感じられた。町屋口遺跡の方は、かなり整然とした水田区画がほぼ全面的に展開し、しかも40cm前後の間層をおいて2時期が抽出されている。それを見ながら、藤田池遺跡の1区・2区の調査を進める際には、同じような整然とした水田区画を想定して取り組んでいったが、その時点では、明確な差異としてどのようなものがあるのかはつきりしなかった。いま2次調査まで済んで、改めて検討すると、一つには畠の遺構の有無がある。

藤田池遺跡では、2区に1つ、3区に5つの畠区画が確認されている。特に3区などを見ると、単位としての個々の区画の認定に問題があるかもしれないが、言い換えれば本当に5つというとらえ方でいいのかという点では確実な認定とはいえないが、とにかくそう捉えられる状況で、水田に混在して畠区画が存在した。それらの時期は、明確な伴出遺物があるわけではないが、明治以降の遺物はほとんど見られないで、水田と同様に近世後半のなかでおさまると理解できる。またその中に南北方向の畠の区画と東西方向の畠の区画（3-12号区画のみ）があり、後者の方がより低位にあり、地下水につかりやすい状況にあるので、作物の違いなども想起される。

畠状の遺構に特色づけられる畠跡は、既に県内でもいくつかの調査事例があって、今回の調査でも新しい内容があるわけではない。しかし、藤田池遺跡のような甲府盆地の最低位の土地で、地下水位がかなり高い場所では、水田はあっても畠までは、との予見を持っていたので、水田区画と入り交じって、畠跡が確認されたことは、この時期の周辺の農村景観を復元する上で、重要な情報であると考えられる。